

現代日本の短期大学の現状と短大生の意識

小野 能文

はじめに

現代の日本社会において、短期大学は特に選抜と配分という社会的機能において厳しい状況におかれている。

すなわち、18歳人口の長期的減少による受験生の持続的減少、女子高校生の共学の4年制大学志向の高まりによる短大志望者の減少、短大卒の就職率の低下による短大の魅力の減少、徹底した技能教育を特徴とする専門学校との競争、さらには父兄の子弟教育における高学歴期待などによって、短期大学の現状が大変きびしいものとなっている。定員割れを起こす専攻や学科が増えてきて、さらに全体で定員割れを起こす短期大学が増えてきている。⁽¹⁾

「1私立短大あたり1時間通学圏（居住）人口が26万人以上でないと定員割れを起こす」という仮説（坂田正二の説）⁽²⁾も提示されている。

短期大学は、このような状況に対処するため、さまざまな面で工夫し努力して来ている。

たとえば、①時代のニーズに合った学科の改組や新設、②カリキュラムの改善や見直し、③入学者選抜の改善や改革、④オープンキャンパスの実施・拡充、⑤教職員の高等学校訪問の強化、⑥広告宣伝の強化、⑦就職指導の強化、⑧校舎の新築や改築、⑨設備の刷新、⑩学位授与機構の認定を受けた専攻科の設置など、さまざまな努力と改革・改善が行われている。

他方、4年制大学へ転換をはかる短期大学が増え、また、廃校になった短大も増加して来ている。⁽³⁾

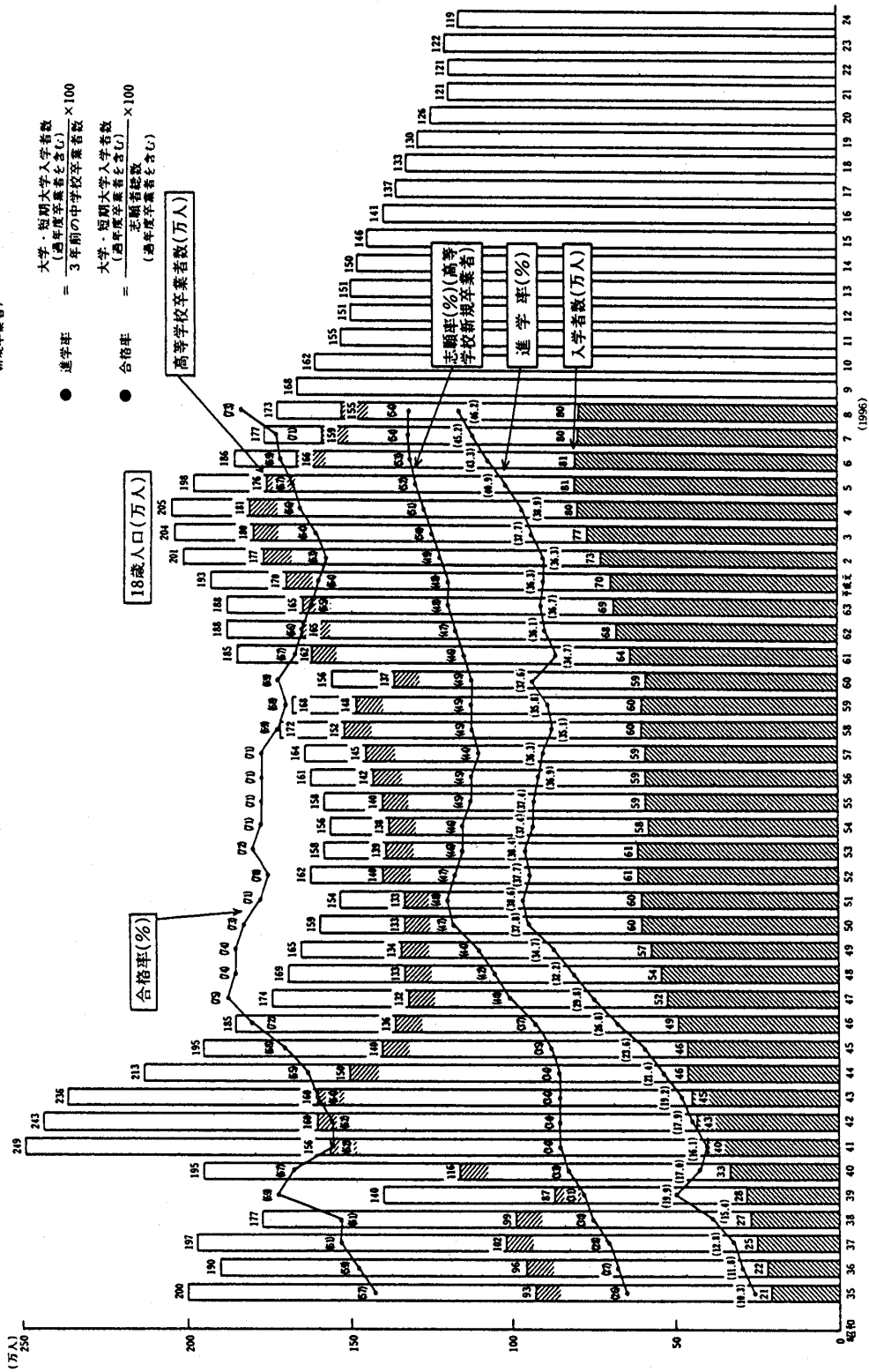
この論考では、現代の日本の短期大学の現状と短期大学生の意識について論じて行こうと思う。

I 現代日本の短期大学の現状

短期大学は、戦後の学制改革で作られた短期の高等教育機関で、昭和25年に発足し、最初は制度的には暫定的なものであったが、私立を中心に逐年増加し、女子の高等教育機関としての社会的評価を受けて来た。高度経済成長期の昭和39年には国公私立合わせて339校となった。こうした状況を踏まえて、昭和39年に学校教育法の改正が行われ、短期大学は恒久的な学校教育制度として、大学制度の枠内に位置付けられた。昭和50年には、短期大学設置基準も制定さ

図-1 大学・短期大学の規模等の推移

- 18歳人口 = 3年前の中学校卒業者数
当年度高等学校卒業者
のうち、大学・短期大学
へ進学を提出した者の数
×100
- 志願率
(高等学校
新入学者)
- 進学率 = $\frac{\text{大学・短期大学入学者数}}{\text{3年前の中学校卒業者数}} \times 100$
- 合格率 = $\frac{\text{大学・短期大学入学者数}}{\text{志願者数}} \times 100$
(過年度卒業者を含む)



(注) 文部省高等教育局企画課作成
(出典) 文部省『文部統計要覧 平成9年版』1997年

小野：現代日本の短期大学の現状と短大生の意識

れて、高等教育機関としての制度的な確立がなされている。ところが、現在、図-1 大学・短期大学の規模等の推移で示されるように、21世紀以降も続く18歳人口の持続的減少という構造的な要因などによって、短大をとりまく状況が非常にきびしいものとなってきている。大学・短期大学への進学率は上昇しているが、詳しく調べると、表-1 大学・短期大学への進学率の推移で示されるように、女子の短大進学率は最近は低下傾向にあり、平成8年では、23.7%で、4年制大学への女子の進学率24.6%に逆転されている。

表-1 大学・短期大学への進学率の推移

区分	大学(学部)・短大(本科)への進学率 (浪人を含む)			大学(学部)への進学率 (浪人を含む)			短期大学(本科)への進学率 (浪人を含む)		
	計	男	女	計	男	女	計	男	女
昭和23年
24
25
26
27
28
29	10.1	15.3	4.6	7.9	13.3	2.4	2.1	2.0	2.2
30	10.1	15.0	5.0	7.9	13.1	2.4	2.2	1.9	2.6
31	9.8	14.7	4.9	7.8	13.1	2.3	2.1	1.6	2.6
32	11.2	16.8	5.4	9.0	15.2	2.5	2.2	1.6	2.9
33	10.7	16.0	5.2	8.6	14.5	2.4	2.1	1.4	2.8
34	10.1	15.0	5.1	8.1	13.7	2.3	2.0	1.3	2.8
35	10.3	14.9	5.5	8.2	13.7	2.5	2.1	1.2	3.0
36	11.8	16.9	6.5	9.3	15.4	3.0	2.5	1.5	3.5
37	12.8	18.1	7.4	10.0	16.5	3.3	2.8	1.6	4.1
38	15.4	21.7	9.0	12.0	19.8	3.9	3.5	1.9	5.1
39	19.9	27.9	11.6	15.5	25.6	5.1	4.4	2.3	6.5
40	17.0	22.4	11.3	12.8	20.7	4.6	4.1	1.7	6.7
41	16.1	20.2	11.8	11.8	18.7	4.5	4.3	1.5	7.3
42	17.9	22.2	13.4	12.9	20.5	4.9	5.0	1.6	8.5
43	19.2	23.8	14.4	13.8	22.0	5.2	5.4	1.7	9.2
44	21.4	26.6	16.1	15.4	24.7	5.8	6.0	1.9	10.3
45	23.6	29.2	17.7	17.1	27.3	6.5	6.5	2.0	11.2
46	26.8	32.5	20.8	19.4	30.3	8.0	7.4	2.2	12.8
47	29.8	35.7	23.7	21.6	33.5	9.3	8.2	2.2	14.4
48	32.2	37.5	26.6	23.0	35.1	10.4	9.1	2.4	16.2
49	34.7	39.9	29.3	24.7	37.5	11.4	10.0	2.4	17.9
50	37.8	43.0	32.4	26.7	40.4	12.5	11.0	2.6	19.9
51	38.6	43.3	33.6	27.3	40.9	13.0	11.3	2.4	20.6
52	37.7	41.9	33.3	26.4	39.6	12.6	11.3	2.3	20.7
53	38.4	43.1	33.5	26.9	40.8	12.5	11.5	2.3	21.0
54	37.4	41.5	33.1	26.1	39.3	12.2	11.3	2.1	20.9
55	37.4	41.3	33.3	26.1	39.3	12.3	11.3	2.0	21.0
56	36.9	40.5	33.0	25.7	38.6	12.2	11.1	1.9	20.8
57	36.3	39.8	32.7	25.3	37.9	12.2	11.0	1.9	20.5
58	35.1	37.9	32.2	24.4	36.1	12.2	10.7	1.8	19.9
59	35.6	38.3	32.8	24.8	36.4	12.7	10.8	1.9	20.1
60	37.6	40.6	34.5	26.5	38.6	13.7	11.1	2.0	20.8
61	34.7	35.9	33.5	23.6	34.2	12.5	11.1	1.8	21.0
62	36.1	37.1	35.1	24.7	35.3	13.6	11.4	1.8	21.5
63	36.7	37.2	36.2	25.1	35.3	14.4	11.6	1.8	21.8
平成元	36.3	35.8	36.8	24.7	34.1	14.7	11.7	1.7	22.1
2	36.3	35.2	37.4	24.6	33.4	15.2	11.7	1.7	22.2
3	37.7	36.3	39.2	25.5	34.5	16.1	12.2	1.8	23.1
4	38.9	37.0	40.8	26.4	35.2	17.3	12.4	1.8	23.5
5	40.9	38.5	43.4	28.0	36.6	19.0	12.9	1.9	24.4
6	43.3	40.9	45.9	30.1	38.9	21.0	13.2	2.0	24.9
7	45.2	42.9	47.6	32.1	40.7	22.9	13.1	2.1	24.6
8	46.2	44.2	48.3	33.4	41.9	24.6	12.7	2.3	23.7

(注) 大学(学部)・短期大学(本科)への進学率(浪人を含む)：大学学部・短期大学本科入学者数(浪人を含む)を3年前の中学卒業生数で除した比率。

(出典) 文部省『文部統計要覧 平成9年度版』1997年。

1. 短期大学の学校数

現代日本の短期大学の現状を、まず短期大学の学校数という点でみると、平成9年5月現在、595校あるが、発足した昭和25年当時は149校であった。その後昭和50年(513校)まで増加の一途をたどるが、最近では横ばい状態である。4年制大学の数の方がほんの少し少ない(586校)が、4年制大学の数の伸び率が短期大学よりも少し大きい。今後、4年制大学への変換や4年制大学の短大部の廃止あるいは廃校が増えると、短大の数が漸次的に減少していくことも予想できる。

2. 規模

短期大学の規模は、入学者数(本科)が平成8年度で22万0875人であり、一校当たりの入学者数は約369人で、私立の短期大学では約412人である。規模の縮小傾向が見られる。4年制大学は、平成8年度で入学者数が57万9148人であり、一校当たり入学者数が約1005人である。

3. 地域性

地域性という点では、短期大学は所在する都道府県内からの入学者の進学率が約58%('96年)と4年制大学(約36%)と比べてかなり高く、⁽⁴⁾地域に根ざした高等教育機関という性格がみられる。ところが、最近の受験生の、共学の4年制大学志向や首都圏等の大都市圏の大学志向という傾向により、構造的に受験生を集めにくくなっている。また、その傾向に関連した4年制の女子大の入試の易化により、受験生を奪われることが増えて来ている。

4. 男女構成

短期大学の学生の男女構成は、女子が90%以上であり、女子の割合が極めて高い。4年制大学における女子学生の割合が平成8年度で34%であるので、かなりの違いが見られる。短期大学は女子の短期の高等教育機関という性格が顕著である。

5. 短期大学の設置者別構成

短期大学の設置者別構成は、学校数では私立が80%以上であり、平成8年では83.9%が私立である。そして、学生数でも90%以上は私立であり、平成8年では92.4%の短大生は私立の学生である。受験生の減少に対する対策として、私立の女子短大を共学化する例が増えて来ている。

私立の短大では、総収入に占める学生納付金の依存度がきわめて高く、先行き不透明な低成長経済のもとで、授業料の大幅な値上げが困難であるので、経営が苦しい。受験生が減り、実入学者数が定員割れを起こして減っていくと、経営が大変きびしくなる。

6. 学科系統(学科専攻)

短期大学の学生の学科系統を調べてみると、本科の場合、男女合計では表-2 専攻分野別学生数のような構成である。

平成8年では、人文系が最も多くて、25.8%の学生が専攻している。

国文学や英文学などである。

表-2 専攻分野別学生数

区 分	計	男	女
平成7年度	489,322	41,890	447,432
平成8年度	463,948	42,790	421,158
人文	119,775	3,574	116,201
文学	100,010	2,252	97,758
史学	923	—	923
哲学	1,692	799	893
その他	17,150	523	16,627
社会	61,567	13,952	47,615
政治学	1,498	378	1,120
社会学	48,775	11,873	36,902
経済学	6,184	292	5,892
その他	5,110	1,409	3,701
教養	15,526	315	15,211
養	15,526	315	15,211
工業	21,357	15,915	5,442
機械工学	7,197	7,002	195
電子通信工学	9,688	5,523	4,165
土木建築工学	2,474	1,936	538
応用化学工学	230	91	139
金属繊維工学	108	92	16
航空工学	—	—	—
経営工学	515	426	89
芸	158	29	129
その他	987	816	171
農業	3,517	1,887	1,630
農学	1,990	911	1,079
農芸化学	329	109	220
農業工学	331	265	66
農業経済学	380	365	15
獣医学畜産学	487	237	250
保健	31,210	2,829	28,381
看護学	16,874	263	16,611
その他	14,336	2,566	11,770
家政	108,809	984	107,825
政治学	86,290	768	85,522
食物学	15,519	146	15,373
被服学	6,828	64	6,764
住居学	172	6	166
教育	72,224	985	71,239
初等教育	17,194	255	16,939
幼稚園教育	51,836	730	51,106
体育	3,194	—	3,194
芸術	22,129	2,284	19,845
美術	8,641	1,121	7,520
音楽	3,535	600	2,935
その他	8,398	452	7,946
その他	1,555	111	1,444
その他	7,834	65	7,769
理学	142	18	124
秘書	7,692	47	7,645

(出典) 文部省『学校基本調査報告書(高等教育機関) 平成8年度』1997年

2番目に多いのは家政系で23.5%である。伝統的に比重の大きい専攻であるが、昭和35年では、37.4%であるので構成比率の低下傾向が見られる。4年制大学では、家政系の比率は1.7%に過ぎず、顕著な違いが見られる。

人文系と家政系で約50%を占めている。

3番目は教育系で15.6%である。幼稚園教育や初等教育などである。

4番目は、社会系で13.3%である。商学や経済学である。ところが、4年制大学では、社会科学を専攻する学生が40%以上を占めていて、最も多い。この点が短期大学と4年制大学の大きな違いである。

5番目は最近増加傾向が明確な保健系で6.7%である。看護学などである。

6番目は芸術系で4.8%、7番目は工業系で4.6%、8番目は教養系で3.3%、9番目は農業系で0.8%と非常に少ない。

7. 短大生の就職

短期大学は、「深く専門の学芸を教授研究し、職業又は實際生活に必要な能力を育成することを目的とする」(学校教育法第69条の2)ものである。職業教育を重要な機能としている。

女子の短大卒の就職率(卒業者に占める就職者の比率)の推移をみると、表-3 就職率の推移で示されるような実態である。

女子の短期大学の卒業生の就職率は、高度経済成長期のころに50%を越えるようになり、短

表-3 就職率の推移

区 分	短 期 大 学			大 学		
	計	男	女	計	男	女
昭和 25 年	63.8	64.1	45.2
26	59.3	66.3	48.3	76.2	74.7	85.6
27	56.7	68.1	42.4	81.0	81.0	81.2
28	60.8	73.4	48.5	79.8	80.2	76.2
29	60.4	72.3	49.2	80.3	81.4	72.8
30	53.5	66.7	42.5	73.9	75.0	67.5
31	52.3	64.4	43.6	73.2	76.0	56.7
32	54.0	67.7	45.5	76.9	80.1	57.2
33	53.5	72.5	43.9	77.4	80.4	59.1
34	55.1	75.0	45.6	79.0	82.3	57.1
35	58.9	79.5	49.8	83.2	86.3	64.1
36	62.5	84.6	54.0	85.6	88.4	69.1
37	59.8	82.3	52.2	86.6	89.4	70.0
38	62.1	82.1	55.2	86.2	88.9	70.6
39	64.5	81.4	58.9	85.6	88.3	71.0
40	63.8	84.1	57.4	83.4	86.6	66.7
41	61.3	85.1	54.0	79.9	83.5	61.9
42	60.8	82.6	55.9	80.5	84.3	62.1
43	63.5	82.9	59.9	81.7	85.3	64.0
44	68.0	82.4	65.6	79.0	83.1	61.5
45	70.3	80.5	68.8	78.1	82.8	59.9
46	70.3	76.8	69.2	79.0	83.4	60.8
47	69.8	72.8	69.3	75.7	80.0	57.9
48	73.0	71.5	73.2	75.3	78.9	60.3
49	75.6	75.3	75.6	76.9	80.1	63.9
50	73.3	75.6	73.0	74.3	77.5	62.8
51	69.0	70.5	68.9	70.7	74.5	57.6
52	71.4	73.1	71.3	72.0	75.9	59.4
53	71.0	71.4	70.9	71.9	75.7	60.2
54	72.3	71.4	72.3	73.6	77.0	62.9
55	76.0	71.8	76.4	75.3	78.5	65.7
56	78.0	73.5	78.4	76.2	79.0	67.6
57	77.8	74.2	78.1	76.7	79.1	69.2
58	78.1	73.9	78.4	76.4	78.7	69.4
59	79.1	73.0	79.6	76.7	78.6	70.7
60	80.7	72.6	81.3	77.2	78.8	72.4
61	81.3	69.9	82.2	77.5	78.9	73.4
62	81.0	66.7	82.2	77.1	78.3	73.6
63	82.0	68.7	83.0	77.8	78.8	75.2
平成 元	85.1	71.6	86.1	79.6	80.1	78.5
2	87.0	72.9	88.1	81.0	81.0	81.0
3	87.0	73.0	88.0	81.3	81.1	81.8
4	85.7	70.6	86.8	79.9	79.7	80.4
5	79.8	66.3	80.8	76.2	76.5	75.6
6	70.1	61.7	70.7	70.5	71.8	67.6
7	65.4	57.3	66.0	67.1	68.7	63.7
8	65.7	56.1	66.5	65.9	67.1	63.5

(注) 各年3月卒業者のうち、就職者(就職進学者を含む)の占める割合である。

(出典) 文部省『文部統計要覧 平成9年版』1997年。

期大学が女子の高等教育機関として社会的に確立して来ることに伴って、卒業生の就職率も着実に上昇し、女子の4年制大学卒の就職率を10%以上上回って来た。しかし、結婚までの「腰掛け就職」という傾向も見られた。いわゆるバブル経済のころは女子の短大卒の就職率は80%を越えていた。ところが、バブル経済の崩壊に伴って、就職率も急激に低下している。

平成6年では女子の短大卒の就職率が80%台から70.7%に落ち、平成7年には66.0%に低下、平成8年3月卒では就職率は66.5%である。

女子の4年制大学卒の場合、バブル経済の崩壊以降、同様に「どしゃぶ

り」とか「氷河期」さらには「超氷河期」などとネーミングされるような就職難の時代になり、平成5年には就職率が80%台から75.6%に落ち、平成6年では67.6%に低下、平成8年3月卒では、平成7年3月卒とほぼ似た63.5%である。4年制女子の場合、大学院進学率が伸びていることも就職率の低下に影響を及ぼしている。

最近では、常勤や正社員での就職の困難さという状況の元で、就職希望者の割合が低下してきて、卒業後、アルバイトなど「一時的な仕事に就いた者」や「無業者」が増加して来ている。

表-4 短期大学の卒業生で示されるように、平成8年3月卒では、一時的な仕事に就いた者・無業者が約25%を占めるようになってきている。平成2年3月卒では7%程度であったので、ずいぶん増加している。

女子の無業者は平成8年3月卒で約4万5000人(卒業者の約20%)もいるのである。

表-4 短期大学の卒業生

区分	卒業生数	進学者	就職者	就職進学者	一時的な仕事に就いた者	無業者	その他	進学率(%)	就職率(%)
昭和30年	28,407	2,672	14,448	739	*	7,744	2,804	12.0	53.5
35	30,401	2,227	17,544	373	*	8,671	1,586	8.6	58.9
40	55,728	3,297	34,575	972	*	12,970	3,914	7.7	63.8
45	114,803	3,825	80,189	551	*	23,657	6,581	3.8	70.3
50	140,938	5,022	103,057	257	*	25,047	7,555	3.7	73.3
55	169,930	5,178	128,941	215	*	27,075	8,521	3.2	76.0
60	174,624	5,085	140,754	116	*	23,184	5,485	3.0	80.7
平成2	208,358	6,900	181,131	98	2,167	14,543	3,519	3.4	87.0
4	226,432	9,319	193,886	113	2,442	16,730	3,942	4.2	85.7
5	240,916	10,795	192,169	107	4,347	27,732	5,766	4.5	79.8
6	246,596	12,888	172,713	62	8,151	44,051	8,731	5.3	70.1
7	246,474	14,213	161,039	51	10,896	51,351	8,924	5.8	65.4
8	236,557	15,209	155,433	43	11,526	48,486	5,860	6.4	65.7
男	18,022	2,962	10,087	29	673	3,389	882	16.6	56.1
女	218,535	12,247	145,346	14	10,853	45,097	4,978	5.6	66.5
国立	4,779	528	3,366	10	77	594	204	11.3	70.6
公立	10,032	713	7,556	1	231	1,208	323	7.1	75.3
私立	221,746	13,968	144,511	32	11,218	46,684	5,333	6.3	65.2
人文	64,512	4,380	39,296	5	3,530	15,523	1,778	6.8	60.9
社会	32,418	2,356	21,990	17	1,263	5,871	921	7.3	67.9
教養	8,557	529	5,643	—	460	1,784	141	6.2	65.9
工業	10,390	1,125	7,108	12	302	1,416	427	10.9	68.5
農業	1,814	314	1,052	1	60	269	118	17.4	58.0
保健	10,531	964	8,220	1	187	1,077	82	9.2	78.1
家政	57,386	2,058	37,985	4	3,213	13,018	1,108	3.6	66.2
教育	36,122	1,477	26,979	1	1,487	5,713	465	4.1	74.7
芸術	10,885	1,859	4,329	2	817	3,086	792	17.1	39.8
その他	3,942	147	2,831	—	207	729	28	3.7	71.8

(出典) 文部省『学校基本調査報告書(高等教育機関) 平成8年度』

無業者の内訳は、就職活動をしている者、家事手伝いや介護をしている者、および就職活動も家事手伝いや介護もしていない者である。

最近では、就職希望者の就職率と卒業者に占める就職者の比率としての就職率の食い違いが大きくなって来ている。就職希望者の就職率がほとんど100%であっても、卒業者に占める就職者の比率が60%台というような実態である。

また、最近では、短大卒者の4年制大学への編入学生の割合が増加している。

これは、女子の4年制大学志向の強まりという要因と、4年制大学の編入学生の受け入れ体制の強化などが影響している。公募だけでなく、短期大学と協定を結んで、毎年一定人数の短大卒者を編入学させる大学が増加している。

昭和60年3月卒で4年制大学への編入学生は約3000人であったが、平成7年3月卒では約1万2000人に増加し、進学率は約5%となっている。⁽⁵⁾

職業別の就職者の実態を調べてみると、表-5 就職者の職業別構成で示されるような構成である。

女子の短大卒の場合、平成8年3月卒では事務職が過半数の53.5%を占めている。

専門的・技術的職業が27.0%であり、幼稚園教員や保育士、栄養士、看護婦などの職業が主な

ものである。

販売職が11.9%である。

表-5 就職者の職業別構成

区分	計	職業別							
		専門的・技術的職業従事者					事務者	販売者	その他
		計	技術者	教員	保健医療従事者	その他			
昭和30年	15,187	6,549	1,078	4,921	—	550	5,429	609	2,600
35	17,917	7,645	2,078	3,502	1,418	647	6,820	1,061	2,391
40	35,547	14,407	3,537	6,830	2,573	1,467	15,233	2,297	3,610
45	80,740	31,796	4,096	16,954	7,007	3,739	37,234	5,769	5,941
50	103,314	39,621	4,310	21,022	7,176	7,113	53,178	3,802	6,713
55	129,156	45,198	5,422	17,363	8,369	14,044	71,436	5,963	6,559
60	140,870	42,140	5,623	15,110	9,283	12,124	82,551	9,279	6,900
平成2	181,229	47,437	9,316	12,680	12,495	12,946	110,089	14,810	8,894
4	193,999	52,517	10,508	13,545	13,384	15,081	115,186	16,054	10,243
5	192,276	51,637	8,121	12,887	14,021	16,643	112,333	17,010	11,258
6	172,775	44,621	5,256	9,926	12,383	17,056	94,243	19,543	14,368
7	161,090	43,463	4,749	9,052	12,905	16,757	84,540	19,105	13,982
8	155,476	42,560	4,840	9,083	12,170	16,467	78,876	19,597	14,443
	(100.0)	(27.4)	(3.1)	(5.8)	(7.8)	(10.6)	(50.7)	(12.6)	(9.3)
男	10,116	3,318	2,272	67	553	426	1,118	2,290	3,390
女	145,360	39,242	2,568	9,016	11,617	16,041	77,758	17,307	11,053
	(100.0)	(27.0)	(1.8)	(6.2)	(8.0)	(11.0)	(53.5)	(11.9)	(7.6)
人文	39,301	856	230	157	101	368	28,611	6,061	3,773
社会	22,007	2,264	600	77	75	1,512	14,110	3,441	2,192
教養	5,643	117	24	10	12	71	4,328	779	419
工業	7,120	2,454	2,388	13	4	49	1,201	1,041	2,424
農業	1,053	419	405	—	3	11	165	175	294
保健	8,221	7,424	31	72	6,841	480	505	75	217
家政	37,989	6,690	925	283	4,355	1,127	22,246	6,003	3,050
教育	26,980	20,348	73	8,325	747	11,203	4,233	1,107	1,292
芸術	4,331	1,942	149	144	15	1,634	1,205	528	656
その他	2,831	46	15	2	17	12	2,272	387	126

(出典) 文部省『学校基本調査報告書(高等教育機関)平成8年度』

II 短大生の意識

以上のような状況のもとで学生生活を送っている現代日本の短期大学生はどのような意識を持っているのかという関心にもとづいて、短期大学生を対象とする意識調査を実施した。短期大学生の最頻のタイプは私立の女子短期大学の学生であるので、兵庫県の私立の女子の短大(S短大)の1、2回生に対して、1997年1月に、質問紙調査を実施した。集合調査法(無記名)で調べた。選択科目の授業時間中に実施したので、回収率はほとんど100%である。しかし受講登録者に対する回答率は約85%である。回答者は、300人弱であるが、無効票や分析上の都合で除いたものがあるので、272人について集計表を作り、分析した。

この短大は中堅の大規模短大で、英語英文学科、家政学科、児童教育学科、美術科から構成されている。⁽⁶⁾

大学生活の目的、価値観、暮らし方、職業観・就職観などについて、質問した。つぎに集計結果と分析結果について述べて行く。

1. 大学生生活の目的

現代の日本の短期大学生が「大学生生活の目的を主に何に置いているか」ということに関しては、女子の短期大学生は、表-6 大学生生活の目的で示されるように、「学生生活を通じて青春をエンジョイすること」を主な目的としている人が32%で、最も多い。このような調査結果は、十数年来一貫した傾向で、これまで、継続して調査しているが、「青春をエンジョイ」することが常に一番多い。ところが、短期大学生は、修学年数（修業年限）が普通2年であるので、4年制大学と比べ授業がつまっていたりゆとりが少ない。そして、社会人になるまでのいわゆる「モラトリアム」の期間が短い。このような短さが短期大学の弱点となっている。⁽⁷⁾

表-6 大学生生活の目的

大学生生活の目的	実数	比率
1 豊かな教養を身につけ人格を高めること	45	16.5
2 専門的な知識や技術を修得すること	56	20.6
3 真の友人を得ること	12	4.4
4 学生生活を通じて青春をエンジョイすること	87	32.0
5 資格を取り就職に役立てること	42	15.4
6 その他	2	0.7
7 とくに目的を意識していない	28	10.3
合計	272	100.0

2番目に多い目的は、「専門的な知識や技術を修得すること」で20.6%であり、「青春をエンジョイすること」を主な目的とする人よりも10ポイント程度少ない。

3番目は「豊かな教養を身につけ人格を高めること」で16.5%である。

4番目は「資格を取り就職に役立てること」で15.4%である。

5番目は「真の友人を得ること」で4.4%である。

「とくに目的を意識していない」人が10.3%いる。なお、「その他」の目的の人が0.7%いる。

表-7 学科と大学生生活の目的

大学生生活の目的 学科	1	2	3	4	5	6	7	合計
	豊かな教養を身につける	専門的な知識や技術の修得	真の友人を得る	青春をエンジョイする	資格を取る	その他	とくに意識していない	
家政学科	11 14.5	15 19.7	6 7.9	25 32.9	8 10.5	1 1.3	10 13.2	76 100.0
児童教育学科	26 19.1	30 22.1	1 0.7	35 25.7	31 22.8	1 0.7	12 8.8	136 100.0
美術科	0 0.0	8 42.1	0 0.0	6 31.6	0 0.0	0 0.0	5 26.3	19 100.0
英語英文学科	8 19.5	3 7.3	5 12.2	21 51.2	3 7.3	0 0.0	1 2.4	41 100.0
合計	45 16.5	56 20.6	12 4.4	87 32.0	42 15.4	2 0.7	28 10.3	272 100.0

大学生生活の目的と関連性の大きな要因は、多変量解析法のCATDAPによる分析では、学科である。CATDAPは、被説明変数も説明変数も共にカテゴリー的なデータの解析に適した多変量解析法である。⁽⁸⁾

学科という説明変数のAIC=-14.22であり、AIC(=情報量基準)の値がマイナスの大きな値なので、大学生生活の目的と学科とは関連性があるといえる。表-7 学科と大学生生活の目的で示

されるように、4学科の間で大きな違いが見られた。

英語英文学科の学生は、「大学生活を通じて青春をエンジョイすること」を主な目的としている人が51.2%と過半数を占めているが、美術科の学生は「専門的な知識や技術を修得すること」を主な目的にしている人が42.1%と最も多い。また、美術科の学生は「とくに目的を意識していない」人が26.3%と他の学科と比べてかなり多い。

児童教育学科の学生は「資格を取り就職に役立てること」を主な目的にしている人が22.8%で他の学科と比べてかなり多い。

家政学科の学生は全体の傾向によく似ている。

大学生生活の目的と血液型との関連をCATDAPによって分析してみると、 $AIC=20.28$ と大きなプラスの値なので、大学生生活の目的と血液型とは関連性が弱いといえる。⁽⁹⁾

表-8 血液型と大学生生活の目的で示されるように、各血液型間の類似性が強い。

表-8 血液型と大学生生活の目的

大学生生活の目的 血液型	1 豊かな教養を身につける	2 専門的な知識や技術の修得	3 真の友人を得る	4 青春をエンジョイする	5 資格を取る	6 その他	7 とくに意識していない	合計
A型	13 12.0	21 19.4	6 5.6	37 34.3	19 17.6	0 0.0	12 11.1	108 100.0
B型	13 25.0	13 25.0	1 1.9	12 23.1	7 13.5	2 3.8	4 7.7	52 100.0
O型	17 19.1	16 18.0	4 4.5	30 33.7	11 12.4	0 0.0	11 12.4	89 100.0
AB型	2 8.7	6 26.1	1 4.3	8 34.8	5 21.7	0 0.0	1 4.3	23 100.0
合計	45 16.5	56 20.6	12 4.4	87 32.0	42 15.4	2 0.7	28 10.3	272 100.0

2. 価値観

短大生の価値観はどのようなものであろうか。ここでは価値観という用語を、いろいろな価値の優劣についての考え、と定義づけている。価値は、望ましいものや値打ちのあるもの、として定義づけている。このような価値観の定義にもとづいて質問調査した。

どのような価値が最も重要で値打ちがあると思っているかに関しては、表-9 価値観で示されるように、「自由」が最も重要で値打ちがあると考えている人が1番多く、29.0%であり、2番目に多いのは「愛」で26.5%である。

継続して調査しているが、今回は「自由」が最も多かった。「愛」は常に、1、2番である。

3番目は「才能があること、豊かな才能」で19.1%で、4番目は「誠実」で17.3%である。「お金が多いこと、富」が最も重要で、値打ちがあると思っている人は4.0%、「美しさ、外観の美しさ」が最も

表-9 価値観

価値観	実数	比率
1 誠実	47	17.3
2 お金が多いこと、富	11	4.0
3 愛、愛情	72	26.5
4 有名なこと、名誉	0	0.0
5 美しさ、外観の美しさ	6	2.2
6 才能があること、豊かな才能	52	19.1
7 自由	79	29.0
8 その他	5	1.8
合計	272	100.0

重要であると思っている人は2.2%であり、「有名なこと、名誉」が最も重要であると思っている人はゼロであった。

表-10 血液型と価値観

最も重視する価値 血液型	1	2	3	4	5	6	7	8	合 計
	誠実	お金が多いこと	愛	有名なこと	美しさ	才能	自由	その他	
A型	19 17.6	2 1.9	33 30.6	0 0.0	1 0.9	12 11.1	40 37.0	1 0.9	108 100.0
B型	11 21.2	2 3.8	9 17.3	0 0.0	2 3.8	16 30.8	10 19.2	2 3.8	52 100.0
O型	14 15.7	7 7.9	26 29.2	0 0.0	2 2.2	16 18.0	22 24.7	2 2.2	70 100.0
AB型	3 13.0	0 0.0	4 17.4	0 0.0	1 4.3	8 34.8	7 30.4	0 0.0	23 100.0
合計	47 17.3	11 4.0	72 26.5	0 0.0	6 2.2	52 19.1	79 29.0	5 1.8	272 100.0

価値観と血液型との関連を調べてみると、関連性が見られなかった。CATDAPによる分析では、AIC = 9.04であり、血液型と価値観とは独立しているということになる。

表-10 血液型と価値観で明かなように、A型の学生は、「自由」が最も重要であると考えている人が37.0%で1番多く、2番目に多いのは「愛」で30.6%である。A

型の人、従来、「ルールや秩序を尊重し、実直」であるといわれているが、⁽¹⁰⁾かなり異なった結果が出ている。

B型の学生は「才能」が最も重要だと考えている人が30.8%と1番多く、2番目に多いのは「誠実」で、21.2%、3番目が「自由」で、19.2%ある。B型の人、従来、「人にしばられたり、抑制されたりするのは嫌い」とされているので、「自由」を重視する人が多いと推定することができるが、今回の調査では、他の血液型の人と比べて「自由」を重視する人の比率が最も低いのである。

O型の学生は「愛」が最も重要であると考えている人が1番多く、29.2%であり、2番目は「自由」で24.7%である。O型の人、従来、「自己主張が強く、きかん気で、感情にかられない」とされているが、かなり異なった結果が出ている。

AB型の学生は、「才能」が最も重要であると考えている学生が1番多く、34.8%であり、2番目は「自由」で30.4%である。

このような価値観に関連した別の質問として、「愛情とお金はどちらが重要だと思いますか」という二者択一の質問が考えられる。回答結果は、図-2 愛情かお金かで明かなように、「愛情」の方が重要だと思っている

図-2 愛情かお金か

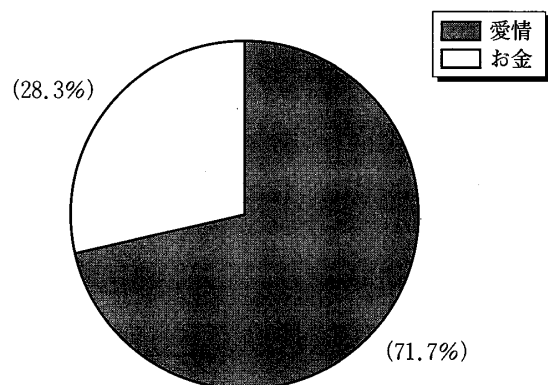


表-11 血液型と愛情かお金か

血液型	愛情か お金か		合 計
	1 愛情	2 お金	
A型	83 76.9	25 23.1	108 100.0
B型	36 69.2	16 30.8	52 100.0
O型	59 66.3	30 33.7	89 100.0
AB型	17 73.9	6 26.1	23 100.0
合 計	195 71.7	77 28.3	272 100.0

人が約7割の71.7%で、「お金」の方が重要だと思っている人は約3割の28.3%である。はっきりと差が出ている。

「愛情かお金か」に関する考えと血液型との関連を調べてみると、表-11血液型と愛情かお金かで明かなように、どの血液型の人でも、「愛情」の方を重視する人が圧倒的に多く、その比率があまりかわらない。

血液型がA型の方が「愛情」の方を重視する人の比率が最も高く、76.9%であり、「お金」の方を重視する人の比率が最も高いのはO型で、33.7%である。

統計学的にも、「愛情かお金か」に関する考えと血液型とは関連性が見られなかった。(A I C=3.08)。

3. 暮らし方

暮らし方に関しては、表-12 で示されるように、最も多い暮らし方は、「お金や名誉を考えずに、自分の趣味にあった暮らし方をすること」で、過半数の52.6%である。これは、これまで行われてきた若者を対象とする「暮らし方」に関する意識調査の結果と合致している。⁽¹¹⁾

2番目に多い暮らし方は、「その日その日を、のんきにクヨクヨしないでくらすこと」で32.0%である。3番目は「一生懸命働いたりして、金持ちになること」で8.1%である。

「有名になること」や「社会のためにすべてを捧げてくらすこと」あるいは「清く正しくくらす」という暮らし方は非常に少ない。「その他」の暮らし方の人が約4%である。

暮らし方と血液型との関連を調べてみると、関連性がなかった。CATDAPによる分析では、A I C=21.19で、暮らし方と血液型とは独立しているということになる。

表-12 く ら し 方

く ら し 方	実 数	比 率
一生懸命働いたりして、金持ちになること	22	8.1
一生懸命勉強したりして、有名になること	5	1.8
お金や名誉を考えずに、自分の趣味にあった暮らし方をすること	143	52.6
その日その日を、のんきにクヨクヨしないでくらすこと	87	32.0
世の中の正しくないことを押しのけて、どこまでも清く正しくくらす	1	0.4
自分の一身のことを考えずに、社会のためにすべてを捧げてくらす	3	1.1
その他	11	4.0
合 計	272	100.0

表-13 血液型とくらし方 で明かなように、各血液型間で、ほとんど違いが見られない。

A型の学生は、「趣味にあったくらし方」の人が51.9%で、1番多く、2番目は「のんきにクヨクヨしないでくらす」で38.0%である。

B型の学生は、「趣味にあったくらし方」の人が59.6%で、1番多く、2番目は「のんきにクヨクヨしないでくらす」で26.9%である。

B型の人には、従来、「物事をくよくよ気にしない」とされているが、今回の調査では、他の血液型の人と比べて「のんきにクヨクヨしないでくらす」人の比率が最も低いのである。

O型の学生は、「趣味にあったくらし方」の人が48.3%で、1番多く、2番目は「のんきにクヨクヨしないでくらす」で、28.1%である。3番目は「金持ちになる」で14.6%である。

AB型の学生は、「趣味にあったくらし方」の人が56.5%で、1番多く、2番目は「のんきにクヨクヨしないでくらす」で、30.4%である。

表-13 血液型とくらし方

血液型	くらし方							合計
	1 金持ちになる	2 有名になる	3 趣味にあつたく くらし方	4 クヨクヨしない	5 清く正しくくらす	6 社会のためにく らす	7 その他	
A型	6 5.6	2 1.9	56 51.9	41 38.0	0 0.0	1 0.9	2 1.9	108 100.0
B型	2 3.8	1 1.9	31 59.6	14 26.9	0 0.0	0 0.0	4 7.7	52 100.0
O型	13 14.6	1 1.1	43 48.3	25 28.1	1 1.1	2 2.2	4 4.5	89 100.0
AB型	1 4.3	1 4.3	13 56.5	7 30.4	0 0.0	0 0.0	1 4.3	23 100.0
合計	22 8.1	5 1.8	143 52.6	87 32.0	1 0.4	3 1.1	11 4.0	272 100.0

4. 職業観・就職観

経済のソフト化や機械化の進展および男女雇用機会均等法の施行や育児休業制度の普及などによって、雇われて働く女性が増え、女性の勤続年数が伸びて来ているという状況のもとで、女子学生の職業に関する意識が発達して来ているといえるが、他方厳しい経済情勢のもとで就職が非常に厳しい状況にある。そこで短大生の職業観と就職観について質問した。

ア. 個性に合っている職業か収入の大変多い職業か

就職する場合、「1. 自分の個性や能力を発揮できるけれども、収入が大変不安定な職業と2. 自分の個性に合っていないけれども、収入が大変多い職業」のどちらを選ぶかという質問に対する回答結果は、「自分の個性や能力を発揮できるけれども、収入が大変不安定な職業」の方を選ぶ人が約3分の2の66.9%である。「自分の個性に合っていないけれども収入が大変多い職業」を選ぶ人が3分の1の33.1%である。これを円グラフで示したものが 図-3 個性か収入かである。個性に合っている職業の方を選ぶ人が収入の大変多い職業を選ぶ人よりもかなり多い。

このことは、個性や能力を発揮できると、やりがいを感じられ、自己の成長が図りやすいと

考えられているからである。

このような職業観と血液型との関連を見てみると、どの血液型の人でも「個性に合っている職業」の方を選ぶ人が多い。B型の人には「個性に合っている職業」を選ぶ人が最も多く、78.8%であり、「収入が大変多い」職業を選ぶ人が最も多いのはO型で、43.8%である。

しかし、独立性の検定では、血液型と「個性に合っている職業か収入の大変多い職業か」に関する考えとの間に関連性が見られた。 $(\chi^2=8.36122 > \chi^2_{0.05,3}=7.82)$ 。AICプログラムによる分析でも、 $AIC=-2.437$ で関連性が見られた。⁽¹²⁾

イ. 能力給か年功給か

長い年月雇われて働くなら、能力給と年功給のどちらを選びますかという質問に関する回答結果は次のようなものである。すなわち、「1. 仕事の実績や能力を重視して給料を決めるやり方（能力給）と、2. 勤続年数や年齢を重視して給料を決めるやり方（年功給）」のどちらを選ぶかという質問に対する回答結果は、「勤続年数や年齢を重視して給料を決めるやり方（年功給）」の方を選ぶ人が50.7%で、「仕事の実績や能力を重視して給料を決めるやり方（能力給）」の方を選ぶ人が49.3%であり、年功給を選ぶ人の方が若干多い。

これを、円グラフで示したものが、図-4 能力給か年功給かである。

このような「能力給か年功給か」に関する考えに関連性のある要因を多変量解析法の、CATDAPで分析してみると、「年功給」の方を選ぶ人は、「家庭」を重視していて、^(49.3%) 「能力給」の方を選ぶ人は、「力がつくこと」や「夢を追求すること」あるいは「個性や能力の発揮」を重視している、ということが分かった。

「能力給か年功給か」に関する考えと血液型との関連性は弱く、 $AIC=2.70$ である。

血液型がAB型の人が「年功給」を選ぶ人の比率が最も高く、65.2%である。

B型の人には「能力給」を選ぶ人の比率が53.8%で、他の血液型の人と比べ若干高い。

ウ. 給料か安定性か

就職するなら、給料がとてもよい会社や職場か非常に安定しているところかという質問に関

図-3 個性か収入か

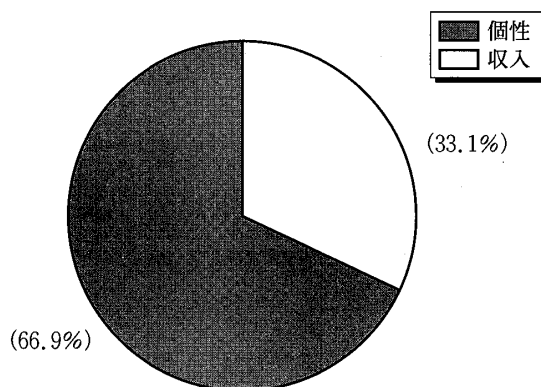
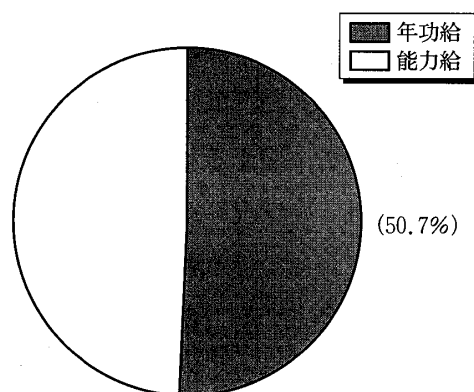
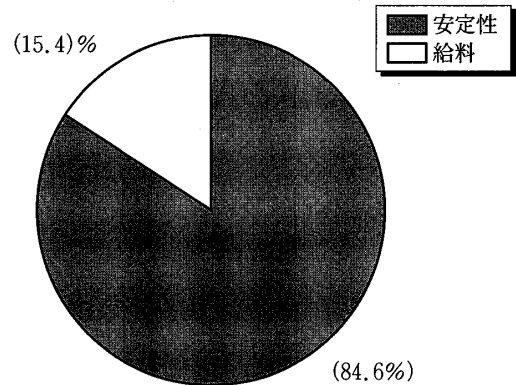


図-4 能力給か年功給か



する回答結果は次のようなものである。すなわち、「1. 給料はとてもよいが、先行き不安定な会社や職場と、2. 給料はよくないが、非常に安定している会社や職場」のどちらを選ぶかという質問に対する回答結果は、「給料はよくないが、非常に安定している会社や職場」の方を選ぶ人が圧倒的に多く、84.6%で、「給料はとてもよいが、先行き不安定な会社や職場」の方を選ぶ人が15.4%である。これを円グラフで示したものが、図-5 給料か安定性かである。

図-5 給料か安定性か



給料がとてもよい会社や職場よりも非常に安定しているところを選ぶ人が圧倒的に多い。

このような、「給料か安定性か」に関する考えに関連性のある要因を多変量解析法のCATDAPで分析してみると、「大学生活の目的」という要因が最も関連性が大きかった。(A I C = -4.27)。

大学生活において「真の友人を得ること」を目的としている人は「非常に安定している会社や職場」を選ぶ人が最も多く、その比率は91.7%である。

「とくに目的を意識していない」人は、「給料がとてもよい会社や職場」を選ぶ人の比率が35.7%で他の目的の人と比べてかなり高い。

「給料か安定性か」に関する考えと血液型との関連性は弱く、A I C = 5.28である。

どの血液型の人でも「非常に安定している会社や職場」を選ぶ人が圧倒的に多い。

血液型がA B型の人「非常に安定している会社や職場」を選ぶ人の比率が最も高く、87.0%である。

エ. 給料か休みの多さか

就職するなら、給料がとてもよい会社や職場か休みが自由に取れるところかという質問に関する回答結果は次のようなものである。すなわち、「1. 給料はとても良いけれど休みがほとんど取れないところと、2. 休みは自由に取れるが給料が少ないところ」のどちらを選ぶかという質問に対する回答結果は、「休みは自由に取れるが給料が少ないところ」の方を選ぶ人が7割弱の68.0%で、「給料はとても良いけれど休みがほとんど取れないところ」の方を選ぶ人が3割強の32.0%である。これを円グラフで示したものが、図-6 給料か休みかである。

給料がとても良い会社や職場よりも休みが自由に取れるところを選ぶ人が圧倒的に多い。

このような、「給料か休みの多さ」に関する考えに関連性のある要因を多変量解析法のCATDAPで分析してみると、「休みが自由に取れるところ」の方を選ぶ人は、「家庭」や「年功」を重視していて、「給料がとても良いところ」の方を選ぶ人は、「夢を追求するこ

と」や「能力」を重視している、ということが分かった。

「給料か休みの多さか」に関する考えと血液型との関連性は弱く、CATDAPによる分析では、 $AIC=1.41$ である。

どの血液型の人でも「休みが自由に取れるところ」を選ぶ人が圧倒的に多い。

血液型がAB型の人が「休みが自由に取れるところ」を選ぶ人の比率が最も高く、82.6%である。

オ. 有名か通勤が楽か

就職するなら、有名な会社や職場か通勤が楽なところかという質問に関する回答結果は次のようなものである。すなわち、「1. 有名だが、通勤に自宅から2時間程度かかるところと、2. 無名だが、通勤時間が30分以内のところ」のどちらを選ぶかという質問に対する回答結果は、「無名だが、通勤時間が30分以内のところ」の方を選ぶ人が圧倒的に多く、74.3%で、「有名だが、通勤に自宅から2時間程度かかるところ」の方を選ぶ人が25.7%である。

これを円グラフで示したものが、図-7 有名か通勤が楽かである。

有名な会社や職場よりも通勤が楽なところを選ぶ人が圧倒的に多い。

このような、「有名なところか通勤が楽なところか」に関する考えに関連性のある要因を多変量解析法のCATDAPで分析してみると、学科が最も関連性が大きかった。 $(AIC=-4.45)$ 。

どの学科も「通勤が楽なところ」を選ぶ人が多く、児童教育学科の学生が最も多く選んでいて、その比率は81.6%である。

英語英文学科の学生は、「有名なところ」を選ぶ人の比率が41.5%で他の学科の学生と比べて多い。

「有名なところか通勤が楽なところか」に関する考えと血液型との関連性は弱く、 $AIC=3.16$ である。

どの血液型の人でも「通勤が楽なところ」を選ぶ人が圧倒的に多い。

AB型の人でも「通勤が楽なところ」を選ぶ人が多く、その比率は82.6%である。

図-6 給料か休みか

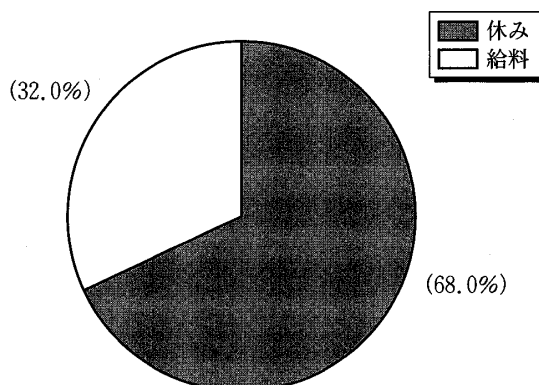
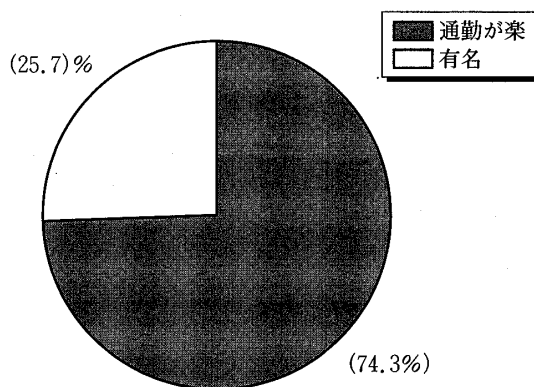


図-7 有名か通勤が楽か



Ⅲ むすび

以上のように、現代日本の短期大学の現状と短大生の意識について考察して来た。

短期大学、特に私立の短期大学が置かれている状況は大変きびしく、解決しなければならない課題が多く、乗り越えねばならない壁があり、今後の短期大学の教職員の努力や創意工夫がますます必要になっている。厳しい競争によって淘汰されるおそれがあるが、独自性を出すことや4年制大学や専門学校との棲み分けをしていくこと等が非常に必要とされているように思われる。

短期大学の学生の意識に関しては、その実態についてさまざまな角度から正確に分析し、基本傾向と思われるものを析出し、意識の規定要因に関して多変量解析法を用いて精密に分析した。血液型という属性的要因に関しては、その影響力が弱いことが明かになり、さらにこれまで考えられて来た各血液型についての見方とは異なる知見が得られた。

今後の研究課題は、今回の調査研究においては、回答者数があまり多くなく、質問項目数も少なかったように思われるので、⁽¹³⁾より多い調査対象者に対してより掘り下げた調査を行うことである。

注

- (1) 私立の短期大学は、1997年5月1日現在、その3分の1以上が定員割れを起こしている。(日本私立短期大学協会の調べ)。定員割れ短大とは、第一年次の学生総定員に対して入学者総数が下まわった短大のことである。
- (2) 坂田正二「地方私立短期大学の定員割れの実態とその意味するもの」『広島文化女子短期大学紀要』第20号、1-16ページ、1987年。
- (3) 中村忠一『「冬の時代」の大学経営』東洋経済新報社、1997年、64-67ページ。
- (4) 文部省『学校基本調査報告書(高等教育機関)平成8年度』大蔵省印刷局、1997年。
入学者の出身高校所在地の都道府県単位で調査している。
- (5) 文部省高等教育局専門教育課「短期大学の現状と改革の方向」『大学と学生』第383号(3月号臨時増刊)、12ページ、1997年。
- (6) 回答者は、年齢が18歳以上20歳以下である。専攻学科は、英語英文学科、家政学科、児童教育学科、および美術科である。居住地域は、近畿地方の兵庫県と大阪府が大部分である。
- (7) 4年制大学の学生は、青春のエンジョイの傾向がより顕著に見られ、大都市圏の私立の共学の総合大学の文科系では、「1に遊び、2にバイト、3にサークル、4、5がなく6に勉強」(中村忠一『「冬の時代」の大学経営』東洋経済新報社、1997年、101-102ページ)と皮肉られるような学生生活を送っている学生がよく見られる。
- (8) 坂元慶行『カテゴリカルデータのモデル分析』共立出版、1985年。

- 小野能文「CATDAP」井上文夫・井上和子・小野能文・西垣悦代『よりよい社会調査をめざして』創元社、1995年、193-203ページ。
- (9) 表-7でわかるように、A型が39.7%、B型が19.1%、O型が32.7%およびAB型が8.5%である。日本人全体での血液型の構成は、A型が最も多くて約4割(38.1%)、次に多いのがO型で約3割(30.7%)、3番目がB型で約2割(21.8%)、そして最も少ないのがAB型で約1割(9.4%)だとされているので、回答者の偏りがほとんど見られないデータであるといえる。 χ^2 検定によると、歪みのないデータである。
- (10) 能見正比古『新・血液型人間学』青春出版社、1985年、142-143ページ、222-225ページ。
- (11) 統計数理研究所国民性調査委員会『第5日本人の国民性』出光書店、1992年、448ページ。
- (12) 小野能文「CATDAP」井上文夫・井上和子・小野能文・西垣悦代『よりよい社会調査をめざして』創元社、1995年、197-203ページ。
- (13) 結婚観やマスコミとの接触度合いあるいは授業観や教師観などについても質問したが、紙幅の関係で今回は述べず、時を改めて調査結果と分析結果について論じたい。

参考文献

- 伊藤順啓『短期大学の社会学』国際書院、1991年。
- 金子忠史編『短期大学の将来展望』東信堂、1994年。
- 池木清『女子短大教育と卒業生の職業状況』北樹出版、1997年
- 関口義「18歳人口増加・減少期の高等教育機関」『私学経営』No.268、平成9年6月号、12-27ページ、1996年。
- 天野郁夫『大学—変革の時代』東京大学出版会、1994年。
- 喜多村和之『誰のための大学か』日本経済新聞社、1980年。
- 高等教育研究会編『大学の多様な発展を目指してI—大学審議会答申集—』ぎょうせい、1991年。
- 中村忠一『「冬の時代」の大学経営』東洋経済新報社、1997年。
- 文部省高等教育局専門教育課「短期大学の現状と改革の方向」『大学と学生』第383号(3号臨時増刊)、10-17ページ、1997年。
- 吉村庸・山崎慎作・原田正行・清原泰治共編『短期大学からの挑戦』南の風社、1996年。
- 東海高等教育研究所編『大学再生の条件』大月書店、1991年。
- 日本私立短期大学協会編『短期大学教育53』日本私立短期大学協会、1997年。
- 坂田正二「地方私立短期大学の定員割れの実態とその意味するもの」『広島文化女子短期大学紀要』第20号、1-16ページ、1987年。
- 文部省『学校基本調査報告書(高等教育機関)平成8年度』大蔵省印刷局、1997年。
- 文部省『文部統計要覧 平成9年版』大蔵省印刷局、1997年。

小野：現代日本の短期大学の現状と短大生の意識

清水一彦・赤尾勝己・新井浅浩・伊藤稔・佐藤晴雄・八尾坂修『教育データランド'97-'98』時事通信社、1997年。

田部井潤・鈴木孝光・栗栖淳「私立短期大学のマーケティング活動の分析」『第49回日本教育社会学会大会発表要旨集録』14-17ページ、1997年。

見田宗介『価値意識の理論』弘文堂、1996年。

真鍋一史「価値観の研究の視座 —その測定方法と領域をめぐって—」『第48回関西社会学会大会報告要旨』1997年、106-107ページ。

坂元慶行『カテゴリカルデータのモデル分析』共立出版、1985年。

坂元慶行「最適なクロス表の選択法」村上征勝・田村義保編『パソコンによるデータ解析』朝倉書店、1988年、155-166ページ。

坂元慶行・石黒真木夫・北川源四郎『情報量統計学』共立出版、1983年。

白佐俊憲・井口拓自『血液型性格研究入門』川島書店、1993年。

大村政男『血液型と性格』福村出版、1990年。

小野能文「CATDAP」井上文夫・井上和子・小野能文・西垣悦代『よりよい社会調査をめざして』創元社、1995年、193-203ページ。

小野能文「多変量解析法としての CATDAP について」『夙川学院短期大学研究紀要』第19号、1995年、63-79ページ。